天理教とイスラーム：
啓示への宗教経済論的アプローチ

山　﨑　好　裕*

１．視点と方法

幕末期には黒住教を嚆矢として多くの新宗教が誕生した。そのなかで最も啓示宗教としての特徴を備えているのが天理教であろう。ここで啓示宗教と呼んでいるのは、神の言葉が教祖への啓示というかたちで示されて誕生した宗教のことである。天理教では、教祖（おやさま）、中山みきに「おふでさき」などのかたちで親神の意思が示された。日本における啓示宗教はきのの如来教から始まり、中山みほを経て、出口なおの大本へと至る系譜を成している。

世界史的には数多くの啓示宗教が存在したわけだが、生きた信仰として現存する啓示宗教のなかで最も純粋なかたちでその特性を持続しているのはイスラームであろう。イスラームでは、ムハンマドに託されたアッラーフの預言がクルアーンというかたちで集成されており、信仰は変わることなくそこに依拠している。そのため、人は信仰において神の意思を直接感じ、神に媒介物なしに対面することになる。こうした啓示宗教としての純粋性が、天理

*福岡大学経済学部

教とイスラームの信仰形態を類似したものにしているのである。

両宗教から感じる類似性は、しかしながら、この段階では直感的なものである。これを客観化し対象化して捉えるためには、宗教学的な分析枠組みが必要であろう。この枠組みは三つにまとめることが可能である。第一は、啓示宗教という特性を意識化した上で、その特性との関係において両宗教を比較していくことである。第二は、両宗教が持つ神観念、世界観、人間観、幸福感といった教義レベルにおける比較である。第三は、信仰中心地などの空間構造の取り方、終末論に典型的な時間構造の把握という観点からの比較になる。

２．二つの啓示宗教の背景

啓示宗教というからには、特有の信仰の成立に神からの啓示が最重要な契機として作用している。まずは、この啓示の在り方において、両宗教を比較してみよう。

中山みきの場合、「神のやしろ」として「天の将軍」にもらい受けられた当初は口頭で「元の神・実の神」の意思を周囲に伝えていた。しかし、時期を経て教団が形成されていくころから、神の意思は「おふでさき」や「みかぐらうた」というかたちで、文字を使って表現されるようになる。これら「おふでさき」、「みかぐらうた」は天理教の最も中心的な経典となっている。

中山みきが啓示を受けたころ、幕藩体制は幕末の崩壊期に入っていた。中山家も大きな農家であったが、貨幣経済の発展と経済構造の大転換のなかで没落の方向へと既に向かっていたのである。したがって、中山みきによって「貧に落ち切る」ということがなかったとしても、いずれは全ての財産を失っていたであろう。

明治維新後の近代経済の展開は農村共同体を崩壊させ、東京や大阪といっ

た大都市に近代的な都市庶民層を滞留させていく。天理教の教勢拡大は大阪での布教によってもたらされたが、そのとき信徒になっていったのは故郷を失って根無し草となった、そのような人々であった。

一方、ムハンマドが啓示を受けたのは、中山みきとは時代も場所も全く違ったアラビアの山中においてであった。山中の洞窟で瞑想していたムハンマドは大天使ジブリールから「読め」と言われるが、文盲であったために拒絶を繰り返す。しかし、ジブリールはムハンマドの首を絞めるなどして強要したため、ムハンマドは神の言葉を預かることになった。ムハンマドはこうしてアッラーフの啓示を口頭で伝え始め、イスラームの信仰が成立していく。アッラーフの啓示はクルアーンとして、現在のかたちに集成され、それ自体が強い崇拝の対象となっていく。ムハンマドは最初「読め」と言われたが、これはクルアーンの元になった「天の書」が存在するという伝承があるためであろう。

農業に全く不向きな環境であるアラビア半島に住む人々は長らく貧困のなかで暮らしていた。ラクダが家畜化されたことで、彼らはそれらを運搬用、食用とすることが可能になり、ラクダ遊牧民としての生活が可能になった。しかし、海岸部のいくつかの町が交易で栄える一方で内陸部は発展から取り残されていた。この地域には政治的に有力な勢力は現れず、ビザンティン帝国とササン朝ペルシャの領土争いの間で帰属を二転三転させていた。そんななか、ササン朝ペルシャが滅亡してビザンティン帝国もアラビア半島を顧みなくなったとき、この真空状況を突いて急激に勢力を伸ばしたのがイスラームであった。イスラームに従う諸族長のモティベーションは信仰心では全くなく、征服地の財宝の分配にあずかることであったのだが。

実際には、ムハンマドは、イスラームで偽預言者と呼ばれるようになる数多くの預言者たちの一人にすぎなかった。その意味で、ムハンマドだけがイスラームという大勢力を築くことができたのは偶然ということである。これ

らの預言者が輩出した背景には、当時アラビア半島にキリスト教の異端派やユダヤ教徒が多数存在したということがあった。

両宗教を比較して興味深いのは、いずれも啓示がパロールからエクリチュールへと移行していき、最終的には文字表現自体が神聖視されていくことである。中山みきの書き記した言葉は、現在も天理教の教団用語として生きて使われているし、クルアーンの場合もアラビア語表現自体が神聖視され、多言語への翻訳は聖典としては認められない[1]。

両宗教が啓示宗教であることは、信者に絶対的に神の意思に従うことを要求する原理主義的態度を持続させることになる。イスラームが戦闘をも辞さず、領土拡張を伴う信仰普及を続けたことは世界史的に有名な事実である。天理教も「にをいがけ」と呼ばれる積極的な布教活動を行った。天理教の場合、その布教態度は他宗教との軋轢を生み、教祖が何度も留置所に拘留されたり、マスコミから激しい誹謗を受けたりすることに繋がったのである。

イスラームではクルアーンやハディースといった規範となる聖典が存在するし、ムハンマドを最後の預言者とする教義から言って、分派の生じる可能性はないように見える。しかし、実際には周知のとおり、スンナ派とシーア派の分裂に始まり、多くの分派に分かれている。これは急激な領域拡大の影響であるとともに、宗教的権威と世俗的権力とが結び付いていたためでないだろうか。世俗的権力との結び付きの意味は両面的である。一つは、教義上でない政治上の対立が分派の原因になるということであり、これは分派を促進する要因となる。もう一つは、政治的統一と独立して宗教的統一を維持するために、公会議や異端審問を開くインセンティブが弱いということであり、これは教義解釈上の違いを容認する態度に繋がる。イスラームでは、ムブタディウ、すなわち、異端とされることが、そのまま破門に直結しない。ムス

[1] クルアーンの他言語への翻訳は聖典ではなく、その解説書と見なされる。

リムを不信仰者とみなすことをタクフィールというが、本人が自ら背教を宣言するのでない限り、厳に慎むべきこととされているのである。

イスラームと異なり、天理教の場合、中山みきだけが特権的な預言者とされているわけでは必ずしもない。したがって、論理的に神の啓示を受ける人間が教祖の後にも登場する可能性がある[2]。実際、天理教は基本的に同じ教義を有する多くの分派を生み出した。現在消えてしまったものも入れれば、その数は百を優に超えるであろうし、新宗教のなかでは突出して多いのである。

３．啓示と教義

神が人類を創造した目的について、天理教は明確に述べている。それが語られるのは「こふき」のなかでである。

「こふき」または『泥海古記』は、中山みきが口述した「元の理」を取次者が筆記したものであるが、定本とされるものがないまま、いくつかの異本が伝えられている。最初のものは明治14（1881）年の山沢良次郎の和歌体本であるとされる。これに明治16（1883）年の桝井伊三郎による散文体本が続き、それ以降も明治20（1887）年にかけて併せて32種類の筆録本が作成されている。

「こふき」は語る。この世の元はじまりはたいら一面の泥の海であり、そこに月様こと国常立尊と日様こと面足尊だけがいた。２神は「この泥海の世界に二人いるだけでは、誰も神として敬ってくれず楽しくない。人間をこしらえて、それらが陽気暮しをするのを見て共に楽しもう」と語り合った。そして、泥海にいるたくさんの泥鰌のなかに魚と巳とを見出して、それらを雛

---

[2] たとえば、大正２（1913）年に大西愛二郎によって創始された「ほんみち」は、大西が中山みきの後継者であり、甘露台そのものであるという啓示を受けることで始まった。

形に人間を創造しようと考えた。創造の道具としては、乾の鯱、巽の亀、東の鰻、坤の鰈、艮の河豚、西の黒蛇を呼び寄せた。まず、魚に鯱を仕込んで男雛形を造ったが、これが伊弉諾尊である。この鯱には月弓尊の名が与えられた。次に、巳には亀を仕込んで女雛型としたが、これが伊弉冉尊である。この亀には国狭槌尊の名が与えられた。他に鰻には雲弓尊[3]、鰈には惶根尊、河豚には帝釈天尊[4]、黒蛇には大苫辺尊の名がそれぞれ与えられた。そののち、２神は人間の種として泥鰌を皆食べてしまい、月様は伊弉諾、日様は伊弉冉の体内に入り込んで、３日３夜にわたり９億９万９千９百99人分の子種を伊弉諾が伊弉冉に流し込んだのであった。

このように「こふき」の冒頭にあるように、神はともに楽しむための同志として人類を必要としている。このようなかたちで人類創成の理由を明示する宗教は珍しいが、やはりクルアーンにもそれに近い叙述はある。

> そしてわれはジンと人間を、われを崇拝させるべくして創造したのだ。われはあなた方からの糧も欲しなければ、あなた方がわれに食を与えることも望んではいない。実にアッラーフこそがこの上ない御力を備えられ、糧を授けられるお方なのだ。（クルアーン51：56–58）

確かにアッラーフは自足しているから、月様と日様のように一人ではつまらないとは言わない。しかし、やはり神として崇拝されることは必要としており、そのために人類を造ることは両宗教に共通している。

---

3 『日本書紀』には対応する神名がないが、中山みきには豊組野尊という神名の記憶があったかもしれない。

4 中山みきは大食天尊と発音しており、後に大日霎貴に比定される。この辺り、記紀神話の導入を強要する当局に対抗する、中山みきの反骨精神が発露されているような気がする。

人間を、陶土のような乾いた土塊から創られた。そしてジンを、混じり合う炎から創られた。（クルアーン55：14–15）

アッラーフはヤハウェと同じように人類を土塊から作り出しており、天理教の神のような親子関係が神と人類の間にあるわけではない。神人の血縁的連続性を強調するのは日本の信仰の特色であるが、イスラームの場合、人類の被造物性が強調されているわけである。しかしながら、同時にクルアーンではアッラーフが天使たちに、人類の祖アーダムはアッラーフの地上における代理人であるとも告げている。天使たちは騒めき、なぜ堕落し血を流すものを代理人とするのかとアッラーフに問うのである。アッラーフは動揺する天使たちに、さらにアーダムに跪拝せよと命じた。天使たちは命に従ってアーダムに跪拝したが、驕り高ぶるイブリーズだけはこれを拒み、悪魔シャイターンとなるのである。ここにあるのは、神にとって人類は代理人であり、必要欠くべからざるものであるという考えであり、根本において天理教と共通するものである。

４．啓示と時空の構造化

天理教においてもイスラームにおいても、空間は一様には広がっておらず、宗教中心地を軸に構造化されている。

天理教では旧中山家の敷地が「おぢば」と呼ばれて人類誕生の地とされており、教会本部が置かれて、その中心の甘露台が崇拝の直接の対象となっている。信徒は「おぢばがえり」をして、「ひのきしん」と呼ばれる奉仕活動をすることになっているが、それ自体が重要な宗教的行為である。

ムスリムがマッカのカアバに向かって日々礼拝を捧げ、一生のうちにハッジに行きたいと夢見ることはよく知られているが、ムハンマドがアッラーフ

の神殿と定めたその地は、既にクルアーンにおいて聖化され特権化されている。

> われらがイブラヒムのために、館の位置を定めたときのことを思いなさい。何一つ、われと一緒に配してはならない。そして、タワーフする者のため、また、立礼する者のために、わが館を清めよ。人々にハッジするように呼びかけよ。彼らは歩いてあなたの許に来る。あるいは、どれも痩せこけている駱駝に乗って、遠い谷間の道をはるばる来る。（クルアーン22：26–27）

このようにカアバがイブラヒムとイシュマエルによってアッラーフの命によって建設されたとされているのである。

> 実にこの場所は、神によって天地が創造されたとき以来、神聖なる場所とされ、審判の日までそうであり続けるのです。（サヒーフ・ブハーリーおよびサヒーフ・ムスリム）

さらに、ハディースになると天地創造の場所という信仰が加わってきて、「をぢば」と同じようになってくることがわかる。

啓示宗教の特徴として、何らかの意味で終末論を持っていることがあげられよう。これは神の啓示は何らかの緊急性があってのことだが、それが多くの場合に人類の危機であり、信仰篤き者を救うために警告がなされるのだからである。

中山みきの信仰に先行するものとして、名古屋の一尊如来きのが開いた如来教の存在が指摘されることが多い[5]。きのは魔道の支配する現世を意味する

[5] 神田（1990）、浅田（2001）を参照されたい。

悪娑婆を離れて、如来のおわす能所（よいところ）へ向かわねばならないとした。『お経様』のなかには末法や世も末といった表現が頻出しており、終末意識が強烈に表現されている。中山みきの場合も、権力者を意味する高山が神の怒りに触れて罰せられ、抑圧された民衆を意味する谷底が神によって救われる刻限が切迫していることを主張し続けた。ともに終末論が強烈に顕在化していることは明らかである。

島薗（2007）では、一尊如来きのが現世を嫌悪する姿勢をグノーシス的と呼んでいるが、この特徴付けによって、中山みきとの対比がはっきりする。既述のように如来教では現世は全面的に否定されており、その厭世的な本質は確かにグノーシス的である。グノーシス神話では、人類が堕とされたこの世は悪神ヤルダバオードが創造した悪の世界であり、人間は自らのなかの光の要素を頼りに、真の至高神が支配するプレーローマ界を目指さなければならないとしている[6]。これらに対して、天理教では厭世的な観念が見られないどころか、陽気暮らしという全面的に現世肯定的な価値観を特徴としている。天理教信者は死を「出直し」と呼ぶが、これは来世観の不在と現世に再生するという思想の現れであろう。

現世を肯定するか否定するか、終末意識が存在するかしないかで分類すれば、それぞれの位置を下図で表すことが出来る。天理教とイスラームは現世肯定的かつ終末論的であり、同じ象限に位置する。ちなみに、現世否定的で終末論的な宗教として、初期キリスト教と如来教を同じ象限に入れてみた。さらに、グノーシス思想は現世否定的であるが非終末論的で一つの象限を占めるであろう。現世肯定的で非終末論的なものとしては、創唱宗教以外の自

6　終末論の関係で言えば、グノーシス思想は善悪二元論であって、永遠に近い時間に渡って善と悪の戦いが繰り広げられる。最終的には善が勝利するが、終末思想それ自体は持たないと言ってよい。

然宗教があらかた入ると思うが、ここでは神道と儒教[7]を一つの象限に入れている。また、初期キリスト教と言っているのは、パウロによって十字架の神学を中心に構成された信仰体系のことである。厭世的であり、ヨハネの黙示録に見るように強烈な終末思想を有する[8]。

仏教については、４象限のなかに敢えて位置づけなかった。浄土教に由来する厭離穢土・欣求浄土など現世否定的な思想や、末法の時代における弥勒菩薩による救済という終末観なども確かに存在する。しかし、釈尊の自力救済に絶えず立ち返る姿勢を持つ仏教は、この枠組みに位置づけることが難しい。

啓示宗教の特色として、空間だけでなく時間も構造化していることがあげられると思う。時間は神による創造という起源を持ち、終末を持って終わりを告げるのである。

５．総括

結論としてまず述べておくべきことは、天理教とイスラームとを宗教学的な枠組みの下で比較した結果、その経済基盤が全く異なるにもかかわらず、両者の類似性が明らかになったということである。その宗教形態的な類似性は、ともに啓示宗教としての特質を純粋なかたちで維持していることに由来していた。つまり、啓示を通して、神と人類は直接的かつ密接な関係を保持し続けている。

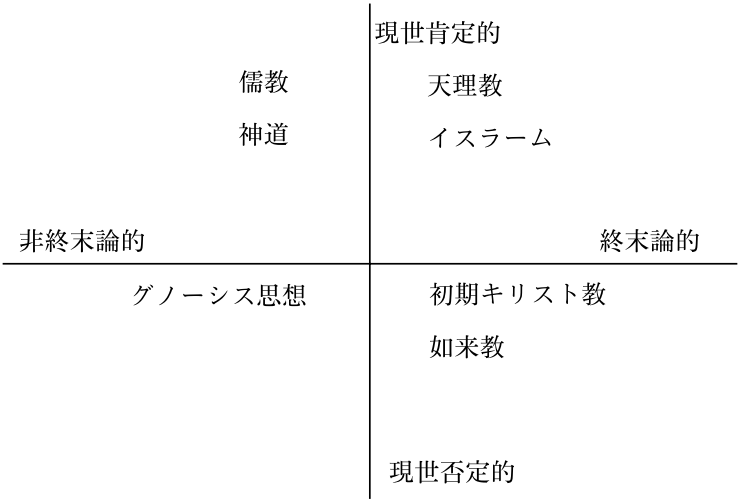
さらに、両宗教では、啓示を軸として時空が明確なかたちで構造化されて

7　念頭に置いているのは、宋学、すなわち、新儒教とも呼ばれる朱子学である。朱子学では禅思想から顕著な影響を受けて、理気説という思弁的な自然哲学を展開した。

8　その後、アウグスティヌスなど教父哲学の登場で、キリスト教は本稿で言う啓示宗教としての色彩を急激に弱めていく。

いた。空間は宗教中心地を軸にして質的な分節化を果たしていたし、時間は創造から終末までの限定した期間のみ流れている。

最後に、天理教とイスラームは現世肯定的な価値観を共有しているのであった。



参照文献

浅野美和子『女教祖の誕生：「如来教」の祖・留全（いずれも女偏が必要）如来喜之』藤原書店、2001年。

神田秀雄『如来教の思想と信仰：教祖在世時代から幕末期にいたる』天理大学おやさと研究所、1990年。

島薗進『スピリチュアリティの興隆：新霊性文化とその周辺』岩波書店、2007年。